# 戦後日本における政治と警察のもたれ合いが生んだ一つの帰結

高坂哲郎（日経新聞）

言葉尻とらえ隊 509

能町みね子

狙撃事件の衝撃が大きすぎて、私はまだ関連の論考などを読みあさってしまいます。

なかでも、日経に載った「政治と警察のもたれ合い（高坂哲郎）」というコラムは印象的でした。彼は、この事件を「戦後日本における政治と警察のもたれ合いが生んだ一つの帰結ではないか」と主張しています。

彼は、01年の同時多発テロの後にアメリカは長大な調査報告書をまとめて事件の再発防止に努力しているのに、地下鉄サリン事件では日本に国家レベルの調査報告書がないことを例に挙げ、政治家と警察のもたれ合いを指摘します。有力政治家はSPを警察から派遣される立場上、よい関係を保たなくてはならず、警察は警察で、予算を認めてもらうために与党に気を遣う。その結果、サリン事件のような空前のテロを許したことについても政治は警察に総括を強いなかった、と。

読売新聞でも「警察全体として、政治家にものを言ってはいけないという空気になっていた可能性」が指摘されています。そのために、政治家が求める聴衆との親しみやすさばかりが優先され、演説中の警備が甘くなっていたわけです。今回は、警察側は元首相の背後に容疑者が近寄ることを易々と許し、しかもSPは二発目の銃撃を阻止する行動に踏み切れませんでした。

話は変わりますが、私はこのコラムを書くとき、目に見える所に掲げている言葉があります。それはコロナが流行り始めた頃に書いた「マスクをすぐに外す安倍、本質を理解する気がない」という私のメモです。

安倍首相（当時）はある時の会見で、テレビに明らかに映っている際にはヨレヨレのアベノマスクを着けて話し、やり取りが終わると剝ぎ取るようにマスクを外しました。これは、その姿が映ってしまったのを見たときに瞬間的にメモした言葉です。

人にうつさない・うつされないために極力しっかりしたマスクをしておくべき／あるいは効果がないと信じるなら堂々と着けずにいるべきなのに、彼は、自分が国民に配ったからという義理で効果の薄いガーゼマスクを着用し、でも本当は着けたくないので、人に見えないところではすぐ外しました。彼はマスクをするという行動の本質的な意味を考えて実行する気がない人なのだ、これは「やってる感」の象徴だ、と思い、今後あらゆる面でこういう欺瞞に敏感になろうと、考え方の指針として記憶しておきたかった情景なのです。

今回の事件は、警備の本質を考えず、政治家ともたれ合う「やってる感」の警備を行った警察が招いたものだと言っても過言ではない。

そして、こんな大失態でも、事件当日の会見に県警本部長が出てこない。もしかするとこれだけの歴史的大事件でも県警の責任追及は甘く済み、不祥事を矮小化するために大した記録は残されないかもしれない。そうなると、これこそが、責任取らない、記録残さない、といった行動が批判されてきた安倍晋三の「レガシー」となってしまう。こんな悲しい皮肉はありません。

のうまちみねこ　物書きで絵描き。1979年北海道生まれ。茨城県出身。近刊に『私以外みんな不潔』『皆様、関係者の皆様』『私みたいな者に飼われて猫は幸せなんだろうか？』他。

## 文春図書館

今週の必読
- 今井むつみ他『算数文章題が解けない子どもたち』
- 加納朋子『空をこえて七星のかなた』

著者は語る
- 川野芽生『無垢なる花たちのためのユートピア』

ミステリーレビュー
- 『ポリス・アット・ザ・ステーション』
- 『潔白の法則 リンカーン弁護士』

ベストセラー解剖
- 『カリスマ保育士てい先生の子育て○×図鑑』

文春図書館推薦
- 『失われたモテを求めて』
- 『ナチス映画史』
- 『22世紀の民主主義』
- 『もう行かなくては』

私の読書日記　鈴木 愛
- 『情動はこうしてつくられる』
- 『子どもが心配』他

### 今週の必読

# それは「読解力がない」のではない！
# 『算数文章題が解けない子どもたち』
## 今井むつみ他

評者　緑 慎也

小学4年の娘が「1・50」を「いってんごじゅう」と読んだので「いってんごーぜろだよ」と間髪入れず指摘するといきなり「もういい」と泣き出した。こちらは宿題を手伝ったつもりだったので面食らったが、数日後に娘から事情を聞いて合点がいった。学校の授業で同じ間違いをし、級友に笑われたという。その上私にも一笑に付され、娘はさらに傷ついたのだった。どう慰めたものか。ヒントを求めて本書を手に取った。

広島県の小学生を対象に、認知心理学の研究者の著者らは新たに開発したテストを実施した。簡単に言えば、従来の学力テストと心理テストの欠陥をつなぐように設計されたテストである。その分析について論じたのが本書だが、ユニークなのは誤答に注目している点だ。

紹介されている誤答例は実に多彩だ。著者らはそこから子供たちが持つ様々な認知能力を読み取り、誤答に至った背景を探っていく。たとえば1／2と1／3の比較で1／3の方が大きいと間違える子供がいる。このことはその子が「数はモノを数えたり、測ったりするためのものだ」という狭い認識しか持っておらず、数の相対的な関係性にまで理解が及んでいないことを示唆するという。

本書の読者対象として想定されているのは教育関係者であるため、統計分析や、テスト実施の注意点などについて多くの紙幅が費やされている。その点、一般の保護者にはややとっつきにくいが、本書から子育てのヒントをくみとることは可能だ。著者らの分析によれば、「1週間前（後）」「前後左右」など時間や空間に関する言葉に対する理解度が、従来の学力テストの成績と強く相関していたという。それなら家庭で子供と日時や位置関係を意識的に考える機会を増やすといいのかもしれない。

専門的な概念を丁寧に説明してくれているのもありがたい。スキーマ（暗黙の知識）、実行機能（必要な情報と不必要な情報を取捨選択する能力）、作業記憶能力（情報を短期的に記憶して様々な操作をする能力）、視点変更能力（他者の視点から物事を見る能力）、推論能力など認知心理学の基本を身につけておけば、我が子の宿題を見るときに役立つだろう。「よく考えなさい」とか「読解力を付けなさい」といった大ざっぱな忠告よりましなことが言えるはずだ。

本書でたくさんの誤答例に触れたおかげで筆者は娘の「いってんごじゅう」という言い方に、彼女なりの位取り記数法に関するスキーマが潜み、それに基づけば合理的であることに気づいた。「いってんごじゅうはおかしな間違いではないよ。その間違いのおかげで小数を深く理解できた子もいるはずだから、どんどん間違えればいい」と声をかけた。娘には「そんなポジティブになれない」と言われたが、少し気を取り直したようだった。

岩波書店　2200円＋税

いまいむつみ　慶應大教授。著書に『英語独習法』等／楠見孝京都大大学院教授／杉村伸一郎広島大大学院教授／中石ゆうこ県立広島大学大学教育実践センター准教授／永田良太　広島大大学院教授／西川一二　大阪公立大学国際基幹教育機構高等教育研究開発センター特任助教／渡部倫子　広島大大学院教授

みどりしんや／1976年、大阪府生まれ。サイエンスライター。著書に『認知症の新しい常識』『消えた伝説のサル　ペンツ』など。